

## 資料紹介

# 知念上クルク原貝塚採集の貝製品について

新田重清

大城逸朗

### 1. はじめに

上クルク原貝塚は、知念村字知念上クルク原1104（伊集採石場内）にある。

1969年8月10日、化石採集のため付近を調査していた喜舎場朝敬氏によって発見されたもので、遺跡の大部分はすでに破壊されていた。こゝから採集された資料は文化財保護委員会に届けられ、同年9月23日多和田真淳氏などによって調査が行なわれ、沖縄では初めてといわれる描画土器などが採集されて注目されるようになった。<sup>註1</sup>

1970年5月17日、筆者の1人、新田は浦添高校郷土史研究クラブ員と共に喜舎場氏に案内され本遺跡を見学したが、崖の急斜面にへばりつくように包含層が確認された。そのまゝの状態では自然消滅の恐れが憂慮されたので、以後数回にわたって資料採集を行なった。一部の資料については、郷土史研究クラブ員によってすでに紹介されているが、大部分は未報告であり、整理が済み次第報告したいと考えている。<sup>註2</sup>

こゝで紹介する資料は、大城が1972年11月9日採集したものである。

### 2. 遺跡の立地

沖縄本島の南部で太平洋側に鉤状に突き出した所がある。こゝに佐敷、知念の両村があり、知念村字知念の南西（図1A）に貝塚は位置している。

付近は、地形的には海拔約10m以下の沖積面、海拔20—30mの不連続な面、それに崩落岩屑によるゆるやかな斜面を形成しながら海拔約120mの3つの段丘がみられる。海拔約120mの段丘をなす所では落差14—15mで屏風状に連ったlimestone wall が発達する。貝塚はlimestone wall の崖下にある。

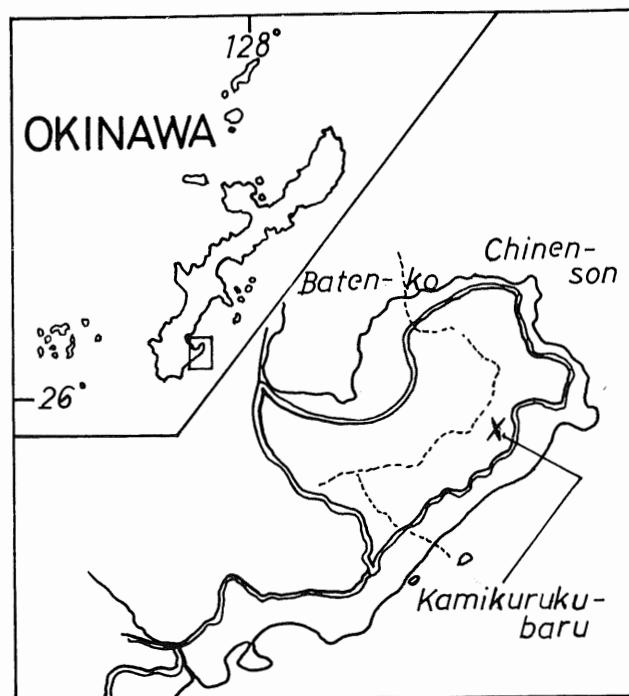
地質的には、この一帯は新生代第四紀洪積世にできた琉球石灰岩から成る。一般にこの種の石灰岩からなる所では、しばしば多くのフィッシャーが発達し、フィッシャー堆積物からシカ化石をはじめ多数の脊椎動物化石が採集されている。又、limestone wallの断面にはフィッシャー起源あるいは海食によるケイブなども発見されている。

この貝塚の発見された所も、現在残っている limestone wall の壁面にみられる鐘乳石の発達程度から判断して、深さ4～5mでN50°—60°E方向にのびたフィッシャーだったようにおもわれる。

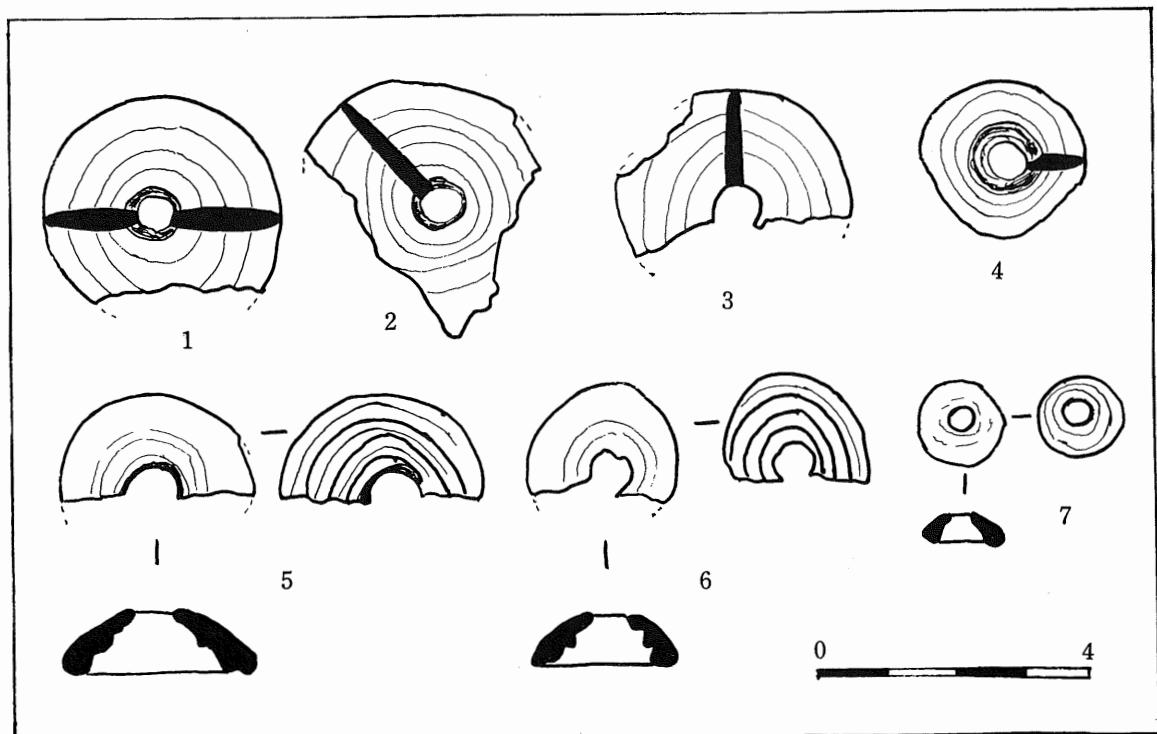
遺物は、このフィッシャーに投げこまれ、本来なら、この中から発見されるはずのものが採石によりフィッシャーの片側が削り取られ、流れ出して崖斜面に付着し、一部は石灰岩礫を含む砂利の中に含まれるようになったとおもわれる。なお、砂利の中から（写真4）こゝで紹介する貝製品や人間の犬歯、臼歯などが検出された。

### 3. 資料紹介

人間の犬歯や臼歯とみられる資料については、他の出土資料とともに、後日、専門家に検討をお願い  
(にったじゅうせい・沖縄県立博物館学芸員)  
(おおしろいつろう・沖縄県立博物館学芸員補)



第1図 A 貝塚付近略図



第1図 B 貝製品

することにしてこゝでは割愛し、貝製品について述べる。

採集された貝製品は、完形品1及び欠損をしているが、形が推定できて個体として数えられるもの26個、計27個、検出されている。

形状は二種に分けられる。

イモガイの一種を螺塔と体層を磨研して扁平状にし、中央に小孔を穿つたもの（第1図B1～4、写真7、8及び写真12の5～16）20個及び小形のイモガイとおもわれるものの螺塔と体層を磨研し、螺塔部の大部分をのこし幾つか背の高いもの（第1図B5～7、写真9、10）7個である。

第1図Bの1（写真7の左）は外径35mm、最大厚3.8mm、外周の断面はやゝ丸味を帶びている。中央には、ほぼ5.0mmの不整形の小孔が穿たれている。

同4（写真8の右）は、推定外径24mm、最大厚3.0mm、外周の断面はやゝ尖り状をなしている。磨耗しているためであろうか。孔は一方から穿たれている。

同5は、螺塔の部分はよく磨研されているが、内側（裏側）に自然の殻面がみられる。標品の高さは9.0mmである。写真10の右が同標品の表で写真11の左が裏である。

同6も類似したものである。写真10の左が同標品の表で写真11の右が裏である。

同7（写真9）は、採集された資料のうちの完形品である。高さは4.0mmである。<sup>註3</sup>筆者が実見したところでは、同種の資料の沖縄本島での出土は、嘉手納貝塚から1個、勝連城跡本丸から20個検出されている。<sup>註4</sup>

本島以外での出土例では、全く類似するものが種子島広田遺跡から出土していることが知られている。調査報告では貝製垂飾品とされ、珠数玉のように連ねて使用したと考えられている。

最も興味深いことは埋葬に伴って出土していることである。上クルク原貝塚では発掘調査によって確認されたことではないので積極的な発言は控えたいが、同一地点から人間の歯が検出されたことによって埋葬に伴った可能性が強いようにおもわれる。沖縄を含む葬玉的形式について、すでに国分直一氏が論考しているが、沖縄の先史時代における葬制を考古学的調査によって把握された例は、きわめて少ないことから本遺跡が破壊されたことは全く痛恨である。せめて、包含層の保存された部分でも組織的な調査が待たれる。

次に問題にしたいのは、本貝製品に伴なう土器など共伴遺物の有無である。前述したように貝製品の出土した地点では土器は検出されていない。しかし、地点を異にして飛地的に包含層がみられる。こゝからは土器や石器、骨器などが検出されている。土器は、大山式、カヤウチバンタ式、宇佐浜式などが認められるが、手法に退化的現象もみられ、その形式設定と編年は慎重を期して検討されるべきであるが、以上の土器に関連するものではなかろうかと考えられる。

このことについては、重要な問題であるので、後日、本報告をするなかで再度検討してみたい。

註1. 沖縄初の描画土器・知念村に新貝塚 文保委が現場で確認 1969年9月26日 沖縄タイムス

註2. クルク原貝塚の位置と調査経過 うらおそい第2号 1972年9月 浦添高等学校 郷土史研究クラブ

註3. 嘉手納貝塚発掘報告書 新田重清 嵩元政秀 1960年版 文化財要覧所収

註4. 勝連城跡第一次発掘調査報告書 1965年6月 琉球文化財調査報告書所収

註5. 種子島南種子町広田の埋葬遺跡調査概報 国分直一 盛園尚孝 昭和33年2月 考古学雑誌 第43巻第3号

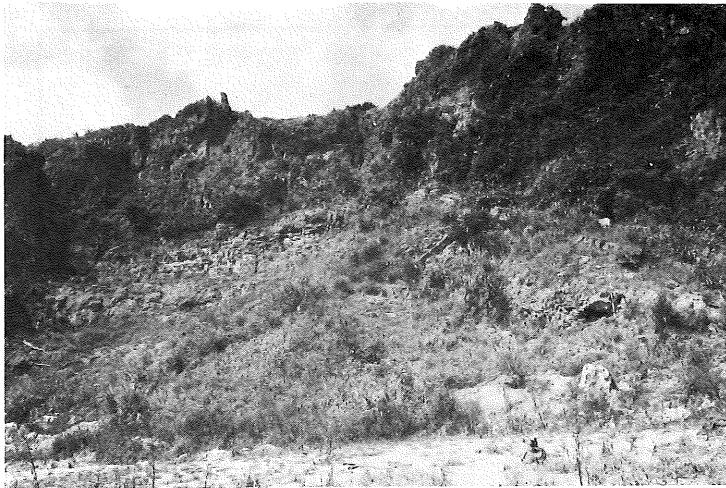


写真1 貝塚全景

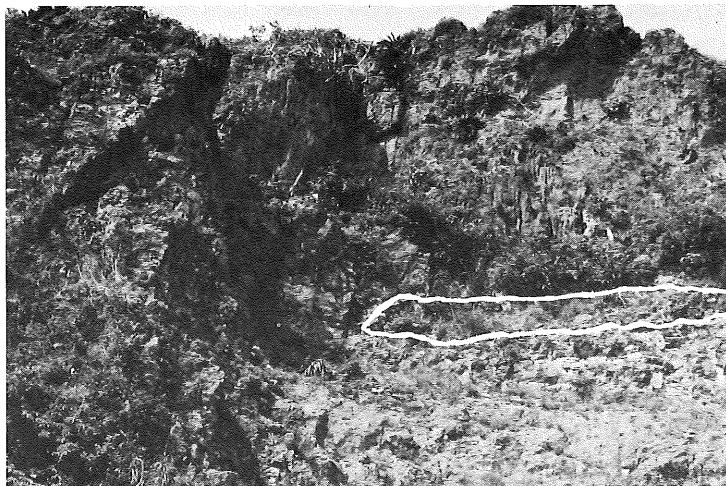


写真2 崖面に包含層がみられる



写真3 斜面に流れ出した砂利層



写真4 貝製品の出土した砂利層

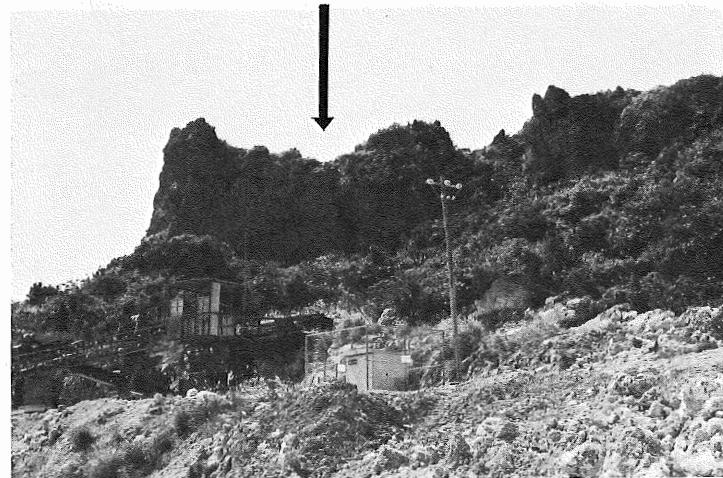


写真5 遺跡の原形を推定できる地形



写真6 貝塚から海岸をのぞむ

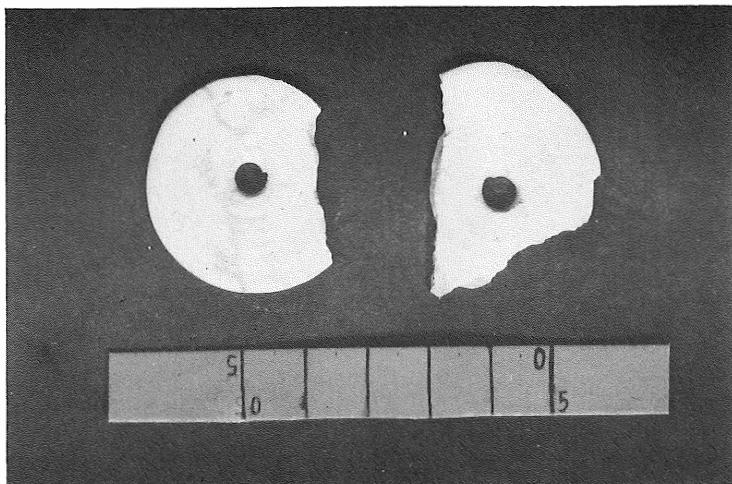


写真7 貝製品

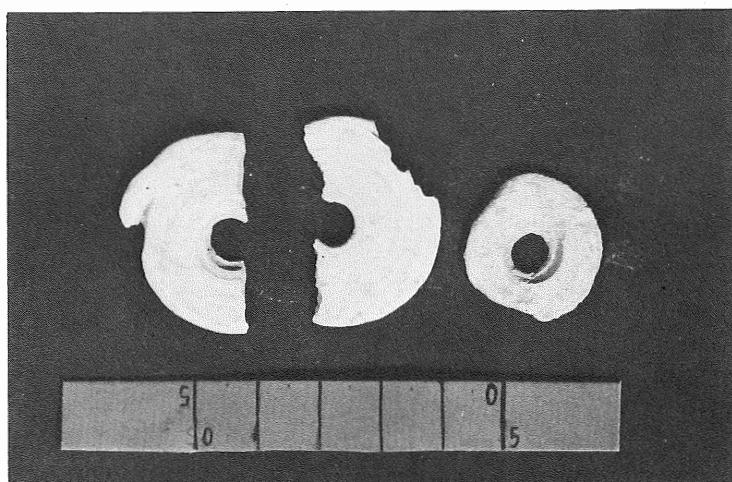


写真8 貝製品

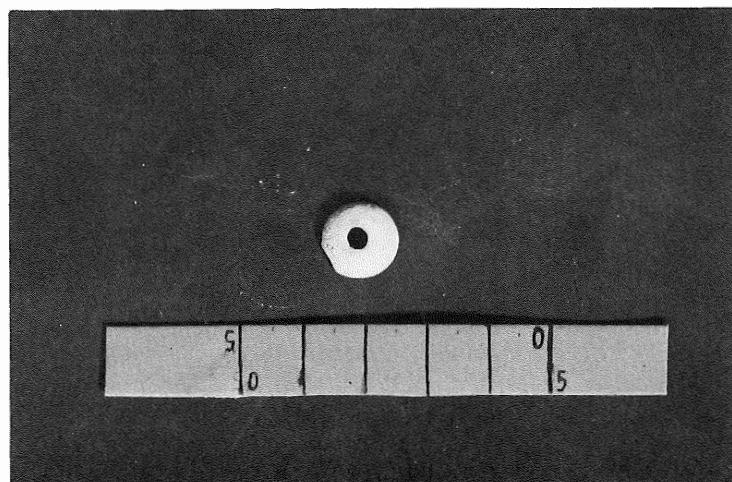


写真9 貝製品

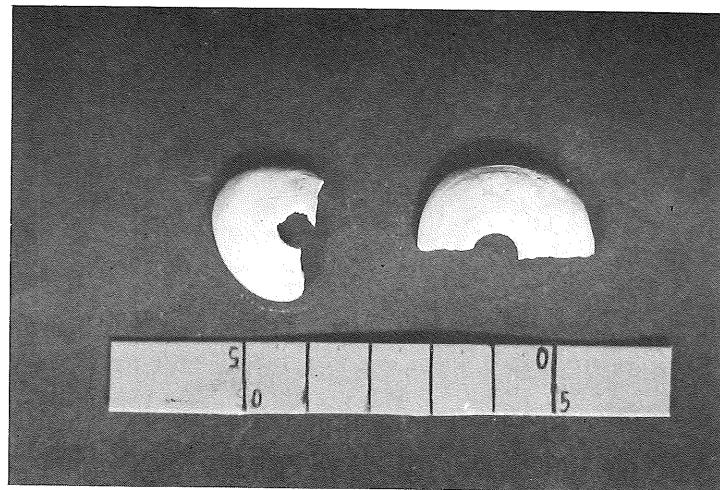


写真10 貝製品(表)

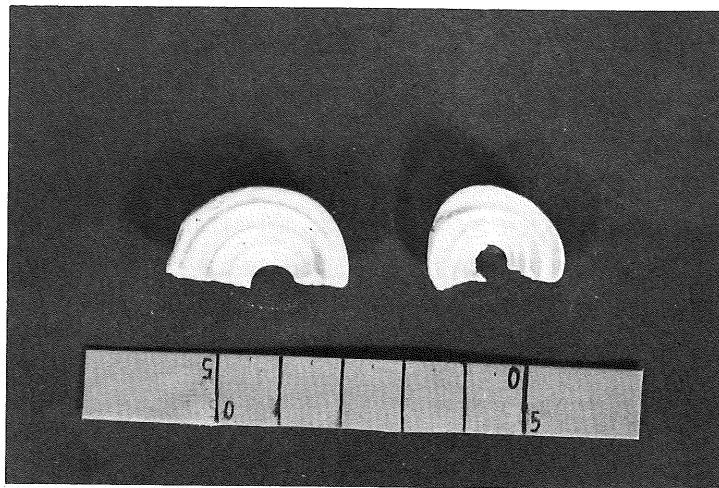
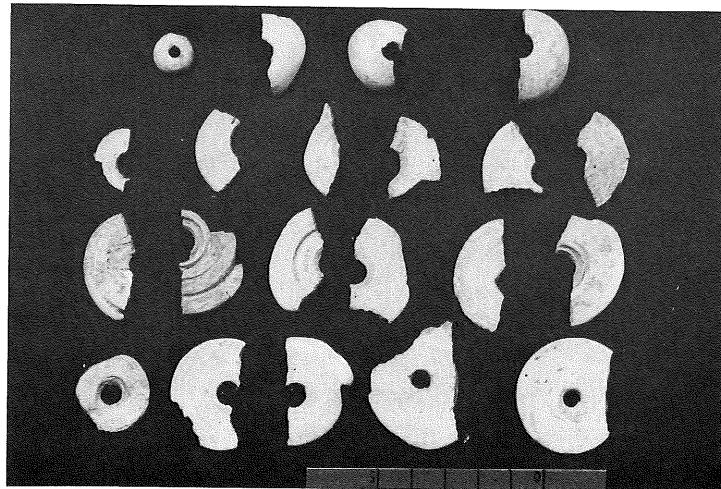


写真11 (同10) 裏



1 2 3 4  
5 6 7 8 9 10  
11 12 13 14 15 16  
17 18 19 20 21

写真12 貝製品